

■ フェアプレー精神を心に ■

ずいぶん古いが、1995年のことだ。秋田高校剣道部3年の白根康互(やすのぶ)君は、高校総体秋田県予選の団体戦に出場した。先鋒だった。順調に勝ち上がり、迎えた決勝戦。

1本先取された。その後、事は起こった。相手の竹刀が白根君の肩あたりに引っかかった。相手は思わず落刀した。

規定では一打に限って攻撃が認められている。当然、白根君は打ち込むことができた。打ち込んでいれば、同点に持ち込めていただろう。だが、彼は、打たなかった。打たずに、竹刀を拾い上げて相手に手渡した。果たして、彼は負けた。団体としても敗れ、念願の全国大会出場はならなかった。

いま、日本大アメフト部の悪質なタックルが社会問題になっている。関学大との51回目の定期戦。パスを投げ終えて無防備な関学大の選手に、背後から日本大の守備選手が激しくタックルした。倒された選手は全治3週間のけが。加害選手はさらに複数回の反則行為を続けて退場になった。

フェアプレーとは何か。「フェアとは自分の良心に照らして絶対に恥じない行為をし、それを誇りとする精神である」とは、ラグビー日本代表チームの監督を務めた大西鉄之祐の言葉である。自分の価値判断として、汚いことはせず、きれいな生き方をしようということをいう。強くなるために、勝つために、何をしてもいいということをやしとはしない。

相手の竹刀を持つときは、片膝をついて鰐元を持つ。剣道を習う者が教えられる礼法である。あの時、打ち込んでいれば結果は変わっていたかもしれない。白根君は勝負よりも礼を重んじた。鰐元を持って竹刀を拾い、両手で相手に差し出したという。「自分はただ礼に従い、自然な気持ちでやっただけのこと」と白根君。そのとっさの「良心に照らして恥じない行為」は称賛を呼び、第8回ユネスコ・日本フェアプレー賞の大賞が贈られた。

1学期中間試験が終わり、いよいよ高校総体県予選へ。早い競技は今週末から本番を迎える。プレーにも、応援にも、高校生としてあるべきフェアプレー精神を心に全力を出し切ってきてほしい。

参考：Number 1996年9月号「落刀」【出久根達郎】